

《修士論文要旨》

三好達治『測量船』論

—感情の情景化について—

「測量船」は昭和五年十二月二十五日に第一書房より刊行された。この詩集に収められた三十九編のうち、三十六編の詩があらかじめ同人雑誌に掲載されたものであった。多くの雑誌に関わる、多くの同人に囲まれた中で様々な影響を受けた三好達治（以下、三好）の作風は、一体どのようなものであったのだろうか。それを検討するために、幾篇かの詩を読解してその中から見えてくる共通項を探り出そうと思う。

「池に向へる朝餉」は、同人雑誌「信天翁」（昭和三年二月発行）に発表された。この詩には、室生犀星の「小景異情」の影響が見られることを指摘出来る。この「小景異情」は犀星が東京と故郷の金沢を行き来していた体験がもとになっている。地元にながら外で昼食をとる視点人物が感じる疎外感と、お碗の中を泳ぐ白魚しおらしさとが同調し、そして「かなしみ」が誘発される。この詩において、「魚」は「かなしみ」を引き起こす装置である。

三好は、この情景を作り変えて「池に向へる朝餉」を描いた。まず、三好は古典的な文語体「五・七・五」の韻律を用いることによって、

*
山下 要

ひとり居の侘しい食卓を描き出した。そして「ひとり居をわびしといはむ／いくたびか／朝餉の箸をやすませて」と続く。この変化を数字で表記するなら、「五・七・五・七・五」という形になる。この韻律の中央に位置する五音、すなわち「いくたびか」は、「ひとり居をわびしといはむ」と「朝餉の箸をやすませて」の両方に係るのである。そうする事によって、ひとり居を何度も「わびし」く感じ、それと共に何回も箸を休ませる事で視点人物の倦怠感をも表現しているのだ。そして「なほさだかならねど、一日のうれひを感ず」を「九・十二（五・七）」と、韻律を引き伸ばす事によって、静かに感情へ寂れていく「一日のうれひ」を表現しているのである。これより後にも「五・七・五」の韻律は巧みに用いられる。「ちひさき魚は水に消え／かなしみばかりしたしけれ」と、切れのいい「五」からではなく「七」から始める事によって、「かなしみ」へと沈み込む心情を表現しているのだ。

このように、この詩は古典的な文語体を思わせる韻律を変化させていく事によって視点人物の「かなしみ」へと向かわせているのであ

る。

「池に向へる朝餉」において溜められた「かなしみ」は、「感情」となって詩「冬の日」（信天翁）昭和三年三月発行）において表現された。この詩は「冬の日 しづかに泪をながしぬ」と始まる。泪をながしているにも拘らず、眼に映る風景は、「山のかたちさへ冴え冴えと澄み／空はさ青に／小さき雲の流れたり」と描かれている。このように泪で滲む視界をクリアな情景として語ろうとするのは何故なのであろうか。その答えは「泪をながす」という行為の検証をしていく中で明らかになる。

この清澄な風景が、詩のタイトルそのままに空気の澄んだ冬の景色として語られているのと同時に、視点人物の寂寥感をも表現しているという指摘は既になされていて、私もそれには同感である。しかし、泪に洗われた為に清澄な風景が出現した、という解釈には疑問が残る。なぜなら、おのずと泪がかわく仮定を語った「泪をながせば」から「わが泪ひとりぬくはれぬ」に至る描写まで、視点人物は泪で潤ませている筈であるのに、「たつきの方にいそしむ」人々を「音もなく」と、聴覚を遮断して描写することの意味が見出せないからだ。この違和感を解消する契機となったのが、阪本越郎の鑑賞文である。

丸山薫は旧第三高等学校時代の達治について、彼が室生犀星や佐藤春夫の抒情詩を耽読していたといい、「それらの詩人のもつ静かに寂びた世界は、感傷の水を瓶いっぱい抱えている彼の魂

に、きつとやさしい慰めになったのであろう」（その頃の三好君）

と書いている。その「感傷の水」がいっぱいになった詩が、この「池に向へる朝餉」や「冬の日」であろう。

『日本の詩歌22 三好達治』（昭和四十三年十二月十五日 中央公論社刊）

この、丸山薫の「感傷の水」という評言に依拠しつつ、視点人物の内面に溜まっていく「感傷の水」が、眼から溢れ出したものが「泪」であると仮定して読解を進めると、この詩の描写が視点人物の感覚器官を介したものである事に気付く。つまり「泪をながす」ことで眼に映る冬の日の風景は、視点人物の主観を通したために、清澄なものとして描写されているのだ。この様な主観を通した描写における三好の意図は、視点人物の内面にスポットを当てる事にあつたのであろう。そうする事によって、泪を流す事による精神の浄化作用、つまりカタルシスを巧緻に表現しているのである。

「冬の日」が、「感傷」を表現したように、感情を理知的に詠った「郷愁」を紹介しよう。この詩は「オルフェオン」（昭和五年二月第一書房刊）に発表された。

この詩の冒頭部は「蝶のやうな私の郷愁」と始まる。「私の郷愁」は「蝶」の直喩として登場する。郷愁をイメージ化した「蝶」は、籬を越えて「午後の街角に海を見る」のである。それに対して、現実の「私」は、壁に阻まれている為に「海」を見ることが出来ない。その

かわりに壁に耳を当てて「海を聴く」事で「海」を感受する。異郷の「私」に「海」は遠いが、「私の郷愁」をイメージ化した「蝶」にとつて「海」はたやすく辿り着く事の出来る場所なのである。この「海」は、「母と言語の上での機知によつて結び付けられるが、両者は言語の枠組みを越えて、互いを内包しあっている。この機知を示す事によつて「海」と「母」は「懐かしさ」によつて結びついている事を意識させられる。つまり「蝶のやうな私の郷愁」とは、故郷を懐かしむという感情そのものを表しているのである。そして、イメージの「蝶」と「私」を対比させる事によつて、異郷にいながら故郷を想う、という「郷愁」と、もう一つの意味である「ホームシック」までも詩の構造の上において表現されているのだ。

これら「池に向へる朝餉」、「冬の日」、「郷愁」の三編が、感情を詩の構造の上で表現していることに注目したい。様々な詩人の詩風を自分のものにしてきた三好が「測量船」において「新しい詩歌の可能性」を模索してきたその功績は、フランス文学から取り入れた新たな感情を、国境を越えた様々な表現方法によつて描き出したところにあるのではないか。